

自己統制と人との関わりに関する考察

ー5歳児のルール理解をめぐるー

磯沢淳子、尾崎壽子、谷口昌子、堀 千代、〇明神規子（大阪市保育研究会）

研究の目的

筆者らは、子どもの個としての育ちを大切にしたい子ども主体の保育づくりをするため、子どもたちが心の葛藤を乗り越え本当の自分をだし、遊びきれているかを視点としながら保育に取り組んできた。子どもが興味をもったことを中心に保育の計画を作成し、週単位にその計画を編成しなおす弾力的なカリキュラムの作成、子どもが主体的に遊べる保育の環境・保育形態などの工夫、そして子どもの内面理解や、遊びの変化の過程を読み取り援助するために保育カンファレンスの実施などを進めてきた。子どもたちは仲間とぶつかり合い、いくつもの心の葛藤を繰り返しながら、自分の世界を広げていく。時には保育士自身も、子どもたちと一緒に葛藤の渦の中に巻き込まれることもあるが、子どもを理解し子どもの気持ちに添うことができるよう、あせらずゆっくり子どもと向き合ってきた。

ここでは、一人ひとりの自我の育ちを「自分を十分に発揮しているか」「遊びきれているか」という点からルール理解と自己統制の育ちについてみていくことにした。自我の育ちは、認知や言葉、社会的関係の理解や判断力の育ちに支えられているといわれているが、そうした子どもの諸能力の育ちとの関連を考えながら子どもの自己統制の育ちと保育士の関わりのある方について検討する。

研究の方法

・対象

S児ー5歳男児、3歳児で入所。入所当初自分の興味のあるものには熱中するが同じクラスの仲間には興味を示さず集団との関わりはあまりもたなかった。4歳児のとき、自分の思い通りにならないと力で押し通したり、怒って部屋から出て行くなど友だちとの関わりがなかなかうまくできなかった。5歳児クラスになり、6・7月頃から友だちを求め「よして～」と言って遊びにはいり人と関わる姿も見られる。

・手続き

観察記録とエピソード記録を併用してとり記録する保育カンファレンスを実施する。子どもの内面理解、遊びの変化の過程、遊びのなかでの援助の視点について話し合い、子どもの表現や行動の意味について考察

した。さらに保育を通して保育士としての葛藤を出し合い、保育士の内面の変化についても検討した。

事例と考察

1、仲間意識の芽生えと人との関わり

〈事例1〉

ー僕もするー（9月）

5歳児の男児がドッジボールをしようとクラスの子どもたちへの声かけに、「ぼくもする」とS児が名乗りをあげる。ルールのある遊びが大の苦手のS児の突然の第一声にみんな戸惑いと驚き、そして保育士にとってはうれしい場面である。

S児は「先生もしてや、先生、Sのチームやで、〇〇ちゃんはこっち、〇〇ちゃんはあっち」と自分の所属するチームが勝つように、人選をしてチームを振り分ける。ゲームが中盤に入り、ボールがS児に当たる「もう、怒ったぞ、Sばっかし当てたな」と涙をだして悔がり、怒るS児に「S君、怒ったらあかん、ひまわり組やねんから、ドッジボールやからしゃないやんか」とS児と同じチームの子どもたちが、次々とS児に声をかける。ゲームはそんなS児の怒りとは関係なく進み、S児のチームが負けたが、「またしような、今度は負けへんで」とS児から言葉が出る。

〈考察〉

ここでのS児は、人選を意識的にしたり、ゲームの途中でも、自分が負けそうになると悔しがり「しゃないやんか」といわれて涙をのむ、というように進級当時に比べてずいぶん変化してきた。ルールに従って動き、悔しくてもそれを受け入れる力が育ってきた。そうしたS児を支えたのが、「しゃないやんか」と声をかけた他の子どもであったことも見逃せない。S児は、やっど他児との関わりの中かで、自分を切り替えることができるようになってきており、そうできる自分への気付きや自信があったからこそ「やろう」とこの遊びに乗ってきたのではないかと。「自分があたる」と悔しがり怒る」というS児の反応は、ルールの意味を理解し始めた姿と見ることができる。勝ち負けを楽しむようになることがS児のこれからの課題であるが、「またしような」の言葉に、それをもう乗り越えつつあることを感じる。

2、仲間意識の芽生えから広がり与人との関わり

〈事例2〉

ーSはひまわり組のSやー (10月)

運動会の楽しい興奮が残っている10月のある日「リレーしたい!」と5歳児クラスから声が上がり、2つのチームに分かれるが、S児は「一番後ろで走りたい」と白組のアンカーになる。「〇〇ちゃん、走れー、もっと早く走れー、次はTちゃんか、う〜ん、あかんなあ」と言うS児に他児が「何言うてんねん、そんなん言うたらあかんぞ」と注意するといつもだったら言い返すのに「あっそうか、ごめんどめんどめんなさ〜い」と調子よく返事をしている。アンカーになったから機嫌がいい。アンカーのS児は、ラスト5メートルの所で、相手チームの男児がゴールテープを切るのを見たが、クラスみんなの「S、頑張れ」の声援に応じて始めて最後まで走りきる。しかし、「Tちゃんのせいやぞ」と怒り泣いているS児に「そんなん言うな、今度はSがいっぱい走ったらええやんか、ひまわり組やろ」という言葉かけに、S児は、ググッとこみ上げる気持ちを押さえることができた。

〈考察〉

「一番後ろで走りたい」「次はTちゃんか、あかんあ」というところなど、ルールに添って遊ぶことの意味や楽しさ、自分が白組チームであることの理解や集団の意識も芽生えてきている。ここでもまだ、S児は自分の勝ち負けにこだわり、他児を責めるような表現をしているが、そんな自分の思いを切り替えることを友だちの関わりからできるようにもなってきた。S児とそれぞれの子どもとの関わりがS児の気持ちに変化をつくり、白チーム、ひまわり組という集団を意識づけ、S児に言葉かけをする子どもたちも、S児に言うことで集団意識を再認識しお互いの気持ちが繋がっていき、集団ができていく様子がわかる。この一連の事例から、S児が仲間との関わりの中で育ち、他の子どももS児によって新たな気づきをもたらされ育ちあっていくことが保育士の気づきでもあった。このことは、対応に苦慮したS児を保育士が受け入れていく過程でもあったと考えられる。S児に向かい合って3年ついついどう遊んだかという結果に目を向けてしまいがちであったが、一人ひとりが本当に楽しんでいるか夢中になっているか、また遊びを通しての友だちとのぶつかりあいや葛藤をどう乗り越えていっているのか、その遊びの過程における心の体験を大切に見ていきたい。

まとめ

保育士は、自分の保育経験のなかで出会ったことのない子ども、自分の枠組みでは捉えられない子どもとの出会いによって、その子どもを受け入れられない自分に対して限界を感じることもある。だからこそ、保育士全員で、子どもの思いに添った関わりを試行錯誤してきた。子どもが自分をだしきって遊びを遊びこむ為には、まず、保育士が子どもの思いを受け止めていくことの大切さを改めて確認した。子どもの思いを受け止めながら、子どもの思いに輪郭をもたせ、子どもがしたいことを発見していく援助が必要である。しかし、保育は、子どもの育ちを支えるものである以上、どうしても伝えたいこと、こうしたらいいというアイデアや技術を提供したり、考え方を示したりすることも重要であるがその前に、子どもの気持ちがあるのか、その内面を理解し、それに添いながら保育士の思いを伝えていくことが必要である。いかに子どもの思いに添い、その子の育ちに必要な課題を見極め適切な関わりをしていくか、また保育士のその子への思いを伝えていくかということが保育士の課題である。そうしたなかで、子どもが自分のしたいことを友だちとの関わりの中でやり遂げていく、それを楽しんで「やった」「面白かった」という達成感や充実感を堪能していく過程を日々の生活や遊びのなかで作っていくことが必要である。保育は子どもと保育士の葛藤の繰り返しのなかで子どもも保育士も気づきを得て変化し、保育の質が深まっていく。子どもは自分が大切にされていることを実感した時、自分に自信を持ち、自分の世界から飛び出し、自分以外の人との出会いがもてる。そこで必要になってくるのがコミュニケーションであり、子どもにとって遊びはそのコミュニケーションをとる場となる。うまくコミュニケーションするには言葉や認識、自己コントロールなど様々な力が要求される。自分のイメージを友だちに伝え、自分の思いと相手の思いのバランスをとりながら一緒に遊びを作り上げることを楽しむ経験が重要である。そこで生まれる満足感が「自分をだしきる」「遊びを遊びきる」原動力になると考える。そしてその経験がそれぞれの子どもの自我の育ちを促していくと思われる。これからの子どもたちの自我を支える保育について実践を通して検討を重ねていきたい。